

1) カジ／＝梶／楮／構／栲／穀

カジはかつてはタクとも呼ばれていたらしい。タクは『古事記』に出てくる栲縄(タクナワ)を編んだとされる樹木で、出雲の「国譲り」の交換条件として、『天御舎』(アメノミアラカ)を作る時に、これで縄を編んで太い柱を引き立てたといわれている。しかし現在では「栲」と言わずに「梶」の木と呼んでいる。梶の木は「楮」(コウゾ)とも混同されることの多い木で、クワ科カジノキ属の落葉高木である。主に関東地方の南部より西の山地に生え、中国南部、台湾、インドシナ、マレーシアにも分布する。幹は直立し10m以上に達し、春、淡緑色の花を咲かせる。雌雄異株で、雌花穂は紫色をした小球状で、雄花穂は黄褐色で尾状に垂れ下がる。果実は篋(へら)型をしており、赤熟して果球の外に飛び出す。実は食用にもなり青森県八幡(ハチマン)崎の縄文時代晩期の遺跡からも出土している。和名の由来は、楮の古名のカゾが転じたものとする説や、穀の中国音[kat]が転じたとする説、また中国から渡来した穀紙の古音[kokdz]に由来するなどという説がある。別称としてカミノキ、カジノキ、オブチ、コウゾ、マムシカズなどがある。学名は『*Broussonetia papyrifera*』で、属名はフランス人の医師、P.M.A.ブルソネ氏の名に因む。また種小辞は「紙を持った」という意味であるが、紙の原料としては楮には及ばない。このため楮に混ぜたり、提灯紙や傘紙などに利用される。イギリスでは『paper mulberry』といわれ、中国では『楮』『構』『穀』などとも呼ばれる。中国でもいくつもの呼び方があるのは、日本と同じように近縁の種と混同されやすかったためであろう。

古くは梶の木の皮の繊維から『太布』(タフ)という粗布を作ったが、これは徳島県や高知県の山間部で多く生産され、穀物などを入れる袋として、また仕事着などとしても用いられた。南太平洋諸島でも梶の木は最も有用な木の一つに数えられ、この樹皮の繊維質を叩いて伸ばした布地は、イースター島から西の、ポリネシア全域に広がっている。これをハワイでは[kapa](カパ)といい、サモアでは[tapa](タパ)と呼んでおり、栲とは梶の木から作られた繊維もしくは布地のことを言っただけらしい。

要するに梶の仲間は、繊維や紙を作るときの原料になった木で、特に『万葉集』には『布地』としての『栲』がしばしば登場し、「タク」とか「タへ」といわれ、栲縄のほか栲領巾(タクヒレ)とか栲綱(タクヅナ)などとして用いられている。

栲縄(タナワ)の永き命を欲りしくは 絶えずて人を見まくほちこそ
これは巫部麻蘇娘子(カムナキベノマソヲトメ)の歌で、その意味は「私が何時までも永く生きていたいと思うのは、あなたにいつも会っていたいからです。」というもので、この場合の栲縄は「永い」にかかる形容詞となっている。当時は長い縄は栲の繊維を用いて作ったのだろう。『万葉集』には次のようなものもある。

栲領巾(タナヒ)のかけまくほしき妹が名を この势能山にかけばいかにあらむ
つまりこの「栲領巾」は「かける」にかかる言葉として用いられている。「領巾」(ヒレ)

は古代から女性が肩にかけていた布地のことで、当初は呪(マジナイ)的なものだったようだが、次第に装飾としての性格が強くなり、梶(栲)の木から取れる白い繊維、つまりタフ(太布)を用いていたのである。『万葉集』にはさらに詠み人知らずの歌として

栲領巾(タヒ)の白浜波の寄りもあへず 荒ぶる妹(妹)に恋ひつつそおる
というのもある。ここでは「栲領巾」は白い浜にかかる言葉となり、ほとんど枕詞化している。もう一つ例をあげると、持統天皇の有名な歌に以下のようなものがある。

春過ぎて夏来にけらし白たへの 衣ほしたり天の香具山

「白たへ」は衣にかかる言葉ではあるが、単に枕詞というより、「白い」という本来の意味が残されているようにも見える。紀女郎(キノイラツメ)の歌には以下のものがある。

白妙の袖別るべき日を近み 心にむせび音(ね)のみし泣かゆ

「日を近み」は日が近いのという意味で、ここでは「白妙」という言葉の中に、白という意味を感じることはできない。「白妙」は袖にかかる枕詞として用いられている。つまり「タフ」はその色が白であったために、「白いタフ」そして「白いタへ」となり、やがて衣にかかる枕詞となって行ったのである。そして「シロタへ」を最初は「白栲」と書き、やがて「白妙」とも書くようになった。そして枕詞として衣、袖、袂、帯、下紐、服、天領巾(アマヒレ)、雲、波、富士、羽、幣(ミテグラ=01-04-08-1 辛夷の項参照)、さらには藤や藤白などの地名にもかかる言葉となってゆく。藤にかかるのはこの栲のほか、タフ(太布)の材料として、藤の皮の繊維なども用いられたからであろう。柿本人麻呂の歌には以下のようなものがある。

あらたへの藤江の浦にすずき釣る 白水郎(ア)とか見らむ旅行く吾を

あらたへは漢字では「荒栲」、もしくは「荒妙」と書く。これは織り目の荒いゴワゴワとした布地のことで、藤の繊維で織ったものが多かった(02-02-10-4 フジの項参照)。つまり栲は繊維をとる木、もしくは繊維そのものの象徴だったわけで、時と共に本来の意味は失われ、さまざまな形に変化しながら、枕詞化していったのである。永い人類の歴史の中で、いかに言語が形成され、変化していったかを知る一つの証と見ることもできよう。

七夕祭りには、梶の葉に歌を書いて竹に吊るす習慣があった。これを「梶の言葉」といい、当時は「織姫」のことを「梶葉姫」と呼んでいた。また七枚の梶の葉に、幸福を祈る言葉や、恋の思いを遂げられるようにと、祈る言葉を書く風習もあり、こちらの方は「梶の葉」といわれていた。『後拾遺集』には以下のような歌がある。

天の川とわたる舟のかぢのはに 思ふことをも書きつくるかな

恋の心や求愛の意味を込めて、梶の葉に手紙を書いておく習慣もあった(06-01-13)。これを「梶の玉章」(タマズサ)という。梶の葉には墨がよくのるため、紙が乏しかった時代には紙の代りに用いられ、前日の六日には、梶の葉を売り歩く商売もあった。

幕末の文化7年(1810年)に三河の国奥殿藩4代藩主松平乗友の子として生まれ、裏千家十一世の家元となった玄々斎精中は、近代茶道の先駆者となったことで知られて

いる。10歳のとき裏千家の養子となり、50歳のとき得度して精中と称し、生涯を茶道の近代化に腐心した人物である。先人の千利休や古田織部が求めた茶道の根本精神は『自由と個性』であり、両人はこの思想により秀吉や家康に切腹させられる結果となった。しかし彼らは『芸術=哲学』の基本は、自由と個性であると考えたのだろう。玄々斎もまたこの精神を受け継いでいた。質素の中に彼なりの自由と個性を求めて止まなかった。明治5年、今後イスとテーブルの文化が日本にも普及することを予感した玄々斎は『立礼式(リュウレイキョウ)』のお点前を考案した。これは従来の畳の茶室から外へ飛び出すもので、外国人にも茶道を広く知らしめるのに大いに役立って、今日に到っている(01-06-07-02)。

更に玄々斎は茶道の細かい部分にも新しい工夫を凝らした。茶道の花器には陶器や漆器、金属器などの他、しばしば竹ヒゴや蔓などで編んだ籠が用いられていたが、これだと水を入れることはできない。そこで陶器や漆器製の一回り小さな器を籠の中に入れて、花を挿せるようにしていた。この器は『落とし』と呼ばれていたのだが、彼はこの『落とし』を『水差し』として用いることを思いついたのである。しかしこれを水差しとして用いると蓋がない。そこで大きなカジの葉を『落とし』の『葉蓋』(ハブタ)として用いた。茶の湯は自然の遷り変りと一体となって行われるのだが、前述のようにカジの葉は七夕との縁が深い。このため玄々斎はカジの葉の葉蓋の点前を、七夕の茶会の趣向として行ったのである。彼の原点もまた自由と個性だったといえようか。

梶の木はとかく神事との関わりが深く、家紋などとしても多くのものがデザインされている。襲の色目としては表、裏とも萌葱色(モエギイロ)で、七月に用いられた。



大きくて美しいカジの葉は、茶道の世界では、水差しの葉蓋としても用いられた。



カジ (梶)の木の雄花。以下の植物は近縁種か、それとも同一種か。みな同じように扱われてきた。梶、楮、構、栲、穀、発音もよく似ている(千葉県東金市)。



近縁種のクワの若い果実(埼玉県嵐山町)。



コウ(栲)の雄株に咲いた雄花。『古事記』にも登場する木である(小石川植物園)。

[目次に戻る](#)